

## 水戸藩歴史」の行間を探る

### 江戸時代の「水戸藩と常総地方」の逸話

(年度不順)

野澤 汎

★第9代藩主・徳川斉昭時代に奸党・奸臣と疑われ結城寅寿「元執政」は処刑されたが、結城派を支援したとされる鷲子「とりのこ」村の薄井友衛門は、同罪を恐れて一家は江戸へと逃げ伸びた。友衛門は砂金採取と紙問屋で財を成し、水戸藩分限者番付に載る富豪家であった。文政3年(1820年)2,000両を水戸藩に献金をして、郷土に登用されていた。その子孫が、往年の俳優・沢村国太郎、加藤大介、沢村貞子、マキノ雅弘であり、現在活躍中の長門裕之、津川雅彦である。

★元治元年(1864)、当時の当主薄井友衛門が、周辺30カ村の農兵・薄井隊を結成して、諸生派に協力して天狗党と戦った。また、友衛門は諸生派市川三左衛門に従い、会津の戦いで戦死した。友衛門の叔父・七左衛門は自刃、長男宗作は北越で戦死、もう一人の叔父も北陸で自刃した。三男で市川三左衛門の養子となった春吉は、市川宅で天狗党に殺害された。このため明治維新の頃の薄井家は、一族四散の憂き目に会った。

★武田耕雲斎は敦賀で処刑されたが、耕雲斎の孫・金次郎は年少のため、遠島処分と軽減された。その間練小屋に繋がれた金次郎が、情勢の変化で宥免となり、明治元年(1868)水戸帰還を許された。勇躍帰国した金次郎は、江戸屋敷や水戸城下町で、「諸生狩り」を行い、水戸城下を恐怖のどん底に落とし入れた。下町三の町・酒井捨彦も諸生派でこの災難に遭ったが、一歳の秀蔵は母親に抱かれ笠原村の深作家に逃れ、ひい倉に匿われ難を免れた。この秀蔵が、後の日本画家の大家である横山大観であり、一方の深作家には水戸学の権威・深作守文が出ており、最近では映画監督・深作欣二が有名な子孫の一人である。

★武田金次郎は後に水戸藩参政(若年寄)の要職に就いたが、維新後、県政になり他藩出身の県令と折り合いが悪く水戸を去った。金次郎の最期は、伊香保温泉宿の風呂焚きとして、明治26年肝臓病で享年48歳の死亡だった。金次郎の無謀なる業「こう」が齎す因果ではないか。

★横山大観の父酒井捨彦は「諸生狩り」の対象になったが、天狗騒動では諸生派の一員として弱冠17歳で、下妻、水戸藤柄、神勢館、部田野の戦いに転戦した。騒動後の明治になり、測量・製図の才能が認められ、茨城県庁に勤めた。しかし、他藩士が牛耳っていた県庁では、いつまでも昇任できずやむなく上京した。

★日本画家・加倉井和夫の母親の実家、伊藤家は水戸城下町川崎町にある武家屋敷で、その面積は600坪(2000㎡)もあった。昭和13年新たに水戸市立城東小学校を設置するに際し、伊藤家は屋敷全部を学校敷地として提供した。

★水戸出身洋画家の中村彝「つね」の祖父、改革派の中村三五右衛門は、天狗騒動で捕らえられ獄中で憤死した。また、叔父・中村重明も天狗党西上勢に加わり、敦賀で斬死させられた。

★天狗・諸生の藩内抗争の仲裁に入った筈の大発勢が、神勢館で諸生派と戦いを交えた。そのとき矢倉奉行が、「明治の茶人」で有名な高橋義雄(箒庵)の父である。幼い義雄は、熾烈な戦いをまともに体験し、この状況を著し「箒のあと」を上梓している。現在の茨城県立水戸一高は、

創業時に名前が変わり、開校年が確定できないが、水戸中学第一期生として入学したのが高橋義雄である。しかし、その才能を認められ慶応義塾に転校させられた。後の水戸中学名校長・菊池謙二郎は、明治17年3月第3期卒業生として記載されている。

★水戸泉町にあった水戸藩御用旅籠「伊勢彦」の11代当主・平山彦六は、幕末尊攘派の志士たちと交流があった。安政の大獄で犠牲になった頼三樹三郎や、吉田松陰が会沢正志斎を尋ねたとき、この旅籠に泊まって行った。また、桜田門外の変のときは、旅籠の奥座敷で密議が謀られたとのことである。その後も、天狗党志士たちが、宿泊した老舗旅籠である。現存する子孫は、「平山ピアノ社」や「平山クリニック」である。

★明治・大正時代の角聖・常陸山谷衛門は、明治7年(1874)下町宝鏡院前町に生まれる。父・市毛高成は弓道・剣道の達人で、祖父・高矩も水泳・鉄砲の達人で武芸を以て水戸藩に仕えた一家である。幼名・谷「たに」は県立水戸中学に入学したが、父の事業失敗で角界入りした。最高位・横綱を締めてからも、相撲協会発展のため尽力した。横綱在位9年18場所で、負けたのが僅か8番だけだった。市毛家は水戸酒門共有墓地に葬られているが、常陸山が墓参の際、途中の備前堀の橋が破損しかけているのを気遣って、大正初年に新しい石橋を寄贈したという逸話がある。「常陸山橋」は今でも現存する橋である。

★野澤汎先生の著書「水戸藩歴史の行間を探る」よりご紹介しました。